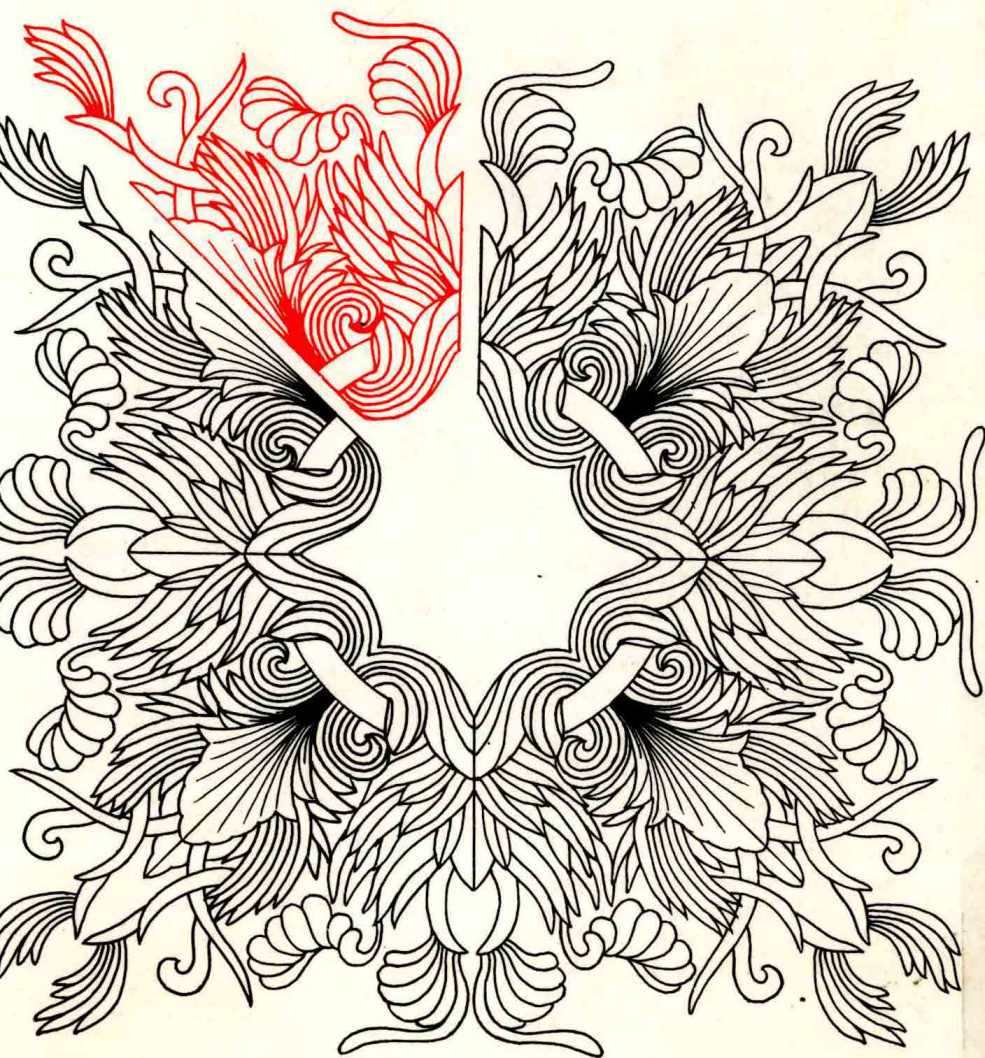


批評の批評

ツヴェタン・トドロフ 著
及川 馥／小林文生 訳



批評の批評

研鑽のロマン

ツヴェタン・トドロフ

及川 馥／小林文生 訳

《叢書・ユニベルシタス 344》

批評の批評 研鑽のロマン

1991年10月22日 初版第1刷発行

ツヴェタン・トドロフ

及川 馥／小林文生 訳

発行所 財団法人 法政大学出版局

〒102 東京都千代田区富士見2-17-1

☎ 03(3237)1731／振替東京 6-95814

製版、印刷・K M S／鈴木製本所

© 1991 Hosei University Press

Printed in Japan

ISBN4-588-00344-5

批評の批評／目次

はじめに	1
詩的言語活動（ロシア・フォルマリストたち）	15
叙事詩の復活（デープリーンとブレヒト）	48
作家兼批評家（サルトル、ブランショ、バルト）	74
人間的なものと人間関係的なもの（ミハイル・バフチン）	116
知識と拘束（ノースロップ・フライ）	150
批評Ⅰ	151
文学Ⅰ	160
文学Ⅱ	162
批評Ⅱ	174
レアリズムの批評（イアン・ワットとの往復書簡）	178
事実と価値としての文学（ポール・ベニシュウとの対話）	203
文学	206
批評「文学研究」	225
対論的批評？	252

訳者あとがき 273

人名索引 (1)

参考文献一覧 (7)

はじめに

I

フランス人は本を読まない。どうもそうらしいのです。しかも、読書について膨大な統計をつくるときには、高級な文芸書と低級な読み物から旅行のガイドブックや料理の本まで、何もかも一緒くたにしているのです。書物についての書物、換言すれば批評の本は、はじめから物の数に入らないごく一部の少数の人たち、すなわちいくばくかの学生とか熱心な愛好家の注意をひくだけにすぎません。でも批評の批評となるとそれはもう最悪で、まさに今の時代の浅薄さのサンプルみたいで、そんなものに誰がいったい興味を感じてくれるのでしょうか。

私の本の主題を弁護して、批評は文学のあつてもなくてもよい盲腸などではなく、なくてはすまさない分身だ（テクストはその真理をすべて述べることは決してできない）とか、解釈という行動は批評よりもはるかに普遍的であるとか、それゆえ、批評の関心は解釈の仕事をいわば専門職化するところであり、

他所ではもっぱら無意識に実行されていることをはっきり目立たせることである、というようにもっていくこともできるでしょう。しかしこのような議論は、それ自体結構なことですが、本書とはかわりがあります。私の意図は、批評を擁護することでも、批評の基盤をきずくことでもないのです。

ではどんな意図でしょうか。

私に関心をもつ二つの主題は入れ子状になっていて、いずれにおいても私は二つの目標を追求します。まず第一に、二十世紀において文学と批評はどのように考えられたか、ということ調べてみたいです。そして同時に、文学と批評を正確に表わす思想というものがあれば、それがどんな姿をしているのかを知りたいと思います。

次に、この時代のイデオロギーの大きな流れが、文学についての考察をおしてどのようにあらわれるのかを分析してみたい、それと同時に、いかなるイデオロギー的立場がもつとも支持できるものなのか、ということも探ってみたいのです。この第二の問題を直接とり上げるにあたつて、私が批評的考察を選んだのは偶然のことです。この「文芸批評という」伝統が私にとってたまたま身近なものだったからにすぎません。さもなければ、たとえば社会学の歴史とか政治思想の歴史が、この問題をより一般的なかたちで研究するために同じように役立ったことでしょう。私自身のイデオロギー的立場の探求については最後にふれることになりましたが、以上のすべての問いかけの基盤をなすものであり、おそらくは動機ともなっているものです。

手短にいうならば、本書では二十世紀のいくつかの批評的著作の意味を問うと同時に、神をもたぬこ

とを止めることなくニヒリズムに対抗する可能性を問うことになるでしょう。

二つの主題、しかもそれが内部でそれぞれ二つに分解する主題を、ぜひとも同時に扱うべきだというふうに感じたことを、どう説明すればよいでしょうか。普遍性に到達することや判断を下すことをあきらめるのは、馬鹿正直か不正直であると思われたでしょうし、それは研究を途中で止めることにもつながったことでしょう。しかも個別的な題材や細部にわたるその探索に手をつけなければ、私は、ある陣営、すなわちすでに真理を所有していて唯一の関心がそれをうまくおしつける発表法をさがすことにしかないという陣営に属することになったでしょう。ところで、私の立場は、真理を探すことと足りますのです（それだけでもすでに十分に野心的でしょう）、しかも次のようなことを私は信じるようになりました。この探求にもっともふさわしい形式は、雑種のジャンル、すなわち見聞録——しかし実録的な見聞録——であり、この場合、それは精神の冒険物語であり、二十世紀文学についての考察であり、それを通して真理の探求が透けて読みとれるような話であるということです。私がおしつけるというよりも、私がこれから提示する実録としての見聞録は、私の相手を考察へとさしむけるものであり、換言すれば、討論を開始するためのものなのです。

私がこれから扱う作家の選択にあたっては客観的な基準と主観的な基準がいくつかあります。

私が興味をもつ歴史の時代は二十世紀中葉、およそ一九二〇年から一九八〇年のあいだであり、分析の対象としたすべての著者は（デープリンひとりものをのぞいて）一八九〇年から一九二〇年のあいだに生まれています。私の両親の世代にあたります。

それから、私のもちいたテクストはフランス語、英語、ドイツ語、ロシア語に制限されていて、その他の言語のものにはふれていません。

私はまた多様性を追い求めました。さまざまな批評の流派や精神の多彩な系譜の代表を分析します。歴史家と並んで体系的で科学的な著作家、宗教思想家や政治的闘士、エッセイストや作家です。

しかしこの種のことをいくら述べても、あげれば数百人にもおよぶ著者のなかから、十人そこそこの名前を私がなぜ取り上げたかを、十分説明したことはなりません。もちろん私は世間の名声を考慮にいれましたが、それにしても私の選択を説明するには不十分です。たったひとつある本当の説明は、私がつとも感銘を受けたと思う著作家を選んだ、ということです。ここで私はフロイト、ルカーチ、ハイデガーを論じていないので、あるいは選択を間違えたのかもしれませんが。しかし、彼らの思索はそれ自体すばらしいものだとしても、私個人が面白いと判断するような反応を、私のなかにひきおこさなかったのです。しかも網羅的であることはまったく私の狙いではなく、私はいくつか代表的なものと足れりとするので、ひそかな交流、対話の可能性というこの基準が正当だと考えるのです。私が論じる作家のうちある人は、今日の私にとってもなお他の作家よりも身近であり、そのことは否定しようがありません。ともかく彼らはいずれも何らかの時点で私を熱狂させたのであり、そして私はこの人たち全員に尽きることのない敬意を抱いているのです。

最後に個人的なことを一言つけ加えなければなりません。本書は数年前に着手された研究、『象徴の理論』（一九七七年、邦訳一九八七年）、『象徴表現と解釈』（一九七八年、邦訳一九八九年）のしめくくりの一

巻です。本書も当初はこれら二巻と同時期に企てられました。ところが、その間に、別のテーマ、つまり他者性のテーマが私の関心の中心になりました。そのために古い企ての実現がおくれただけではなく、内面的な変化すらもたらされました。けれども本書の背景には最初の二巻が提示した大枠が残されています。それゆえ、ここで本質的な要素を二、三述べておくことにしましょう。

II

著者たちの思想の現代性を確認するには、二十世紀の著者を選ぶだけではたりません。いつの時代をとってみても、遠かろうと近かろうと過去の時間が、現在の時間や未来の時間とさえ共存しているからです。二十世紀の代表的な批評思想とは何かと問う場合、年代順の客観性では不十分なのです。くだんの著者たちが、他から受け入れた思想をくりかえし伝統を堅固にするだけにはとどまらず、彼らの時代に特有のものを表現しているのだ、ということさをさらに確認しなければなりません。この割合をきめるには、彼らが対決した過去の遺産の一覧表を、たとえ一般的で概括的であっても作成する必要がおこってきます。

文学や注^{コマンチー}釈についてわれわれがもつ考えは、いつの時代にも通用してきたものではありません。〈文学〉の概念が形成され今日の内容をもつにいたったのは最近（十八世紀末）のことです。それ以前は、大ジャンル（抒情詩、叙事詩、演劇）と小ジャンルが知られていましたけれども、それらをひっく

るめた全体はわれわれの文学の内容よりもっと広範囲なものです。〈文学〉の概念は実用的言語活動との対比から生じました。後者はその正当化の根拠をそれ自体の外にもち、それに対し、文学はそれ自体に自足する言ディスクール説です。したがって、作品と作品が指示するもの、あるいは表現するもの、もしくは教えるものといってもよいのですが、そのあいだの関係、要するに作品と作品の外部にあるすべてのものとの関係は、二次的な価値しかもたないこととなります。それに反し、文学においては一貫した関心が、作品そのものの構造に、作品内部のエピソードやテーマやイマジユのからみ合いに向けられています。ロマン派からシュレアリストやヌーヴォー・ロマンまで、文学流派は、細部においてあるいは用語の選択において分裂してはいますが、このわずかな原理を本質的なものとしてよりどころにすることになります。詩人のアーチボルド・マクリーシュは綱領風な詩のなかで次のように書いています。

詩は意味すべきではない

だが存在すべきだ

Un poème ne doit pas signifier

Mais être.

彼は内在性へのこの傾向を極端につきつめていったにすぎません。意味そのものさえあまりにも外的なものと感じられるようになったのです。

聖アウグスティヌスは〈古典的〉思考法の代表的著作家であり、『キリスト教教程』*la Doctrine chrétienne* には使用 *user* と享受 *jouer* の対比という根本的な対比が定義されています。

享受するとは、つまり、事物そのものへの愛によって事物に執着することである。それに反し、使用するとは使用する対象を人が愛する対象に導くことである。ただしそれが愛されるに値する対象であればのことだが (J. IV, 4)。^{*}

^{*} 原注 引用文の出典は (とくに断りのないかぎり原典を参照している) すべて本文中に出すこととする。ときに省略形にすることもある。巻末に出典一覧を掲げ、仏語訳のあるものはそれも書き添えておく。

この区分は神学上の延長をもっています。結局、神以外のいかなるものも、それ自体として人が享受し、いつくしむに値するものはない、ということになるのです。アウグスティヌスは人間が人間に対してもつ愛を論じながら、この考えを次のように展開しています。

人間が人間に愛されるのはそれ自身のためなのか、あるいは他のもののためなのかどうか、知ることが大切である。もしそれ自身のためであれば、われわれは彼を享受する。もし他のもののためであれば、われわれは彼を使用する。ところで、人間は他のもののために愛されるべきであると、私には思われる。なぜなら、それ自体のために愛されるべき〈存在〉のなかにこそ幸福があるからで

ある。われわれはこの幸福を実際にもつことがないのではあるが、しかしながら、それをもつという希望が、この世においてわれわれを慰めるのである。だが人間のなかにその希望をおく人は呪われている。けれども、精細に検討するなら、誰も自分自身を享受するところまで行くことはない。なぜなら、その人の義務は自己自身のために自己を愛するのではなく、人が享受するところのへあの方のために自己を愛することだからである（I, xxii, 20-21）。

十八世紀末の〈ヘロマン派〉革命の初期代弁者のひとりカール・フィリップ・モーリッツにおいては、階級制はデモクラシーによって、服従は平等によって置換されました。一切の創造は享受の対象となりうるし、またならねばならないのです。人間は享受の対象たりうるか、という同じ問いに対し、モーリッツは人間への賛辞で答えます。

人間が学ぶべきことは、自分がこの世にいるのは自分自身のためだ、ということの新しい証明である。——考える人間においては、各部分がそこにあるのは全体のためであるのとまったく同様に、全体は個別部分のためにそこにあると感じなければならぬ「……」。個々の人間をおよそ実用的な存在である、というふうに決してみなしてはならない。人間はそれ自身のなかに自己本来の価値をもつ高貴な存在とみなすべきである。人間精神はそれ自体で完成したひとつの全体である（『著作集』

p.15-16）。

このようにして享受の新しい社会は開幕を迎えます。数年後、フリードリヒ・シュレーゲルは美的なものと宗教的なものではなく政治的なものとの連続性を明らかにします。

文学は共和主義的言説である。それ自体に対しみずからの規則であり、またみずからの目的である言説であり、しかも言説のすべての部分が自由な市民であり、相互に調和するために意見を述べる権利をもつ（『リケウム』の〈断片〉65）。

したがってここでは文学の内在的な概念が問題となっています。それは近代の支配的なイデオロギーと一致します（私はこの「イデオロギー」という語を、ひとつの社会の成員に共通の思想、信条、価値のシステムという意味でもちい、良心とか科学とか真理などとは対立させていません）。ノヴァーリスが次のように宣言するとき、彼は「いぜんとして美学について述べているのでしょうか。『われわれは広く普遍的に認められた形式の支配した時代にはもはや生きていない』と。超越性の探求の代わりに各個人がみずからの規範に応じて、みずからを判断するという権利を肯定することは、美的なものと同様に倫理的、政治的なものにかかわるのです。近代という時代は個人主義と相対主義の到来によって刻印をおさるのだといっているでしょう。作品がただ内部的な整合性によってのみ規制され、外部の絶対的なものに準拠しないということ、そして作品の意味が無限であって階級化されていないということとは、

またとりもなおさずこの近代的イデオロギーに加担するということです。

注解についてのわれわれの考えもそれと並行して進展してきました。スピノザが『神学政治論』で述べたように、テキストの真理を求めるのをやめて、もはやテキストの意味にしか関心を向けないという要求以上に、過去概念との断絶をみごとに示すものはありません。もっと正確に言えば、スピノザは信仰と理性の区別、したがって真理（宗教的であろうと）と意味（この場合は聖書の）の区別に自信をもち、以前の教父の戦略における手段と目的のふり分けを告発し始めたのです。

アンタル・プレツト 解釈者

者の大多数は原則として（聖書を明快に理解しその真の意味を見分けるため）、聖書はどこをとっても真であり神聖であると主張する。じつは、それは、聖書にいかなる曖昧さをも残さずに、厳格に検討した末の結論であるべきなのに、聖書の研究がいかなる人間的仮構の助けもかりず、よりよくわれわれに証明するようなことを、彼らはまず解釈の規則として示すのである（序文 P. 24）。

スピノザの批評は構造についてであつて内容にわたるものではありません。ひとつの真理を他の真理で代替しようとするのではなく、アンタル・プレツト 解釈の作業のなかで真理の位置を変えることが問題なのです。

新しい意味はこの作業の指導的原理として役立つどころか、その結果となるべきなのです。あるものを探すのに、そのものの自体の助けをかりることはできないということです。テキストの意味の探求は真理への準拠なしに成就されるべきです。十九世紀の文献学はスピノザのこの要請をみずから実行すること

になるでしょう。しかも論争がその現実的な意義を失ってしまったにもかかわらず、ベークなどは『言語科学百科および方法論』（一八八六年）において次のように述べておくべきだと思ったのです。

聖書の解釈において、すべてが信仰と教義の類比にしたがって説明されるべきだと命じることは、まったく非歴史である。ここで解釈を導くべき尺度自体はゆるぎなく確立されてはいないのである。というのは、聖書の説明から生じた宗教理論がきわめて多種多様な形式をとったからである。

歴史的解釈は、作品がいわんとする言語的なことのみを確立すべきであり、それが真であるか偽であるかを問わないのである（p. 120-121）。

かすかな変質がどのようにしておこったかは明らかでしょう。出発点において、テキストの真理についてあらかじめ知っている知識をテキスト解釈の手段として用いてはいけないとしておき、その真理に関係する一切の問いを不適当であると終わりに宣言してしまうのです。〈真理〉とは、ここではあらゆる観点からみて聖書の場合には確立が不可能な、事実としての妥当性を意味するのではなく、普遍的な人間の真理、正義、英知を意味するにとるべきです。スピノザ以後は、注^{コンメンタル}解はもはや「この書物は正しく語っているか」と問うべきではなく、ただ「それは正確には何を語っているのか」と問うべきなのです。注解もまた内在的になったのです。共通の超越性はいかなるものも不在なのですから、それぞれのテキストがみずからの準拠の枠組となり、そして批評家の使命は、一切の価値の判断からは遠くはな

れ、意味の解明と、テキストの形式ならびに機能の記述に終始することになります。それゆえ研究されるテキストと研究のテキストのあいだには質的断絶が確立します。もし注解が真理に関心をもつなら、注解の対象たる作品と同じ次元に立つことになり、両者は同じ目標をもつことになってしまいうでしょう。しかし両者の相違は根本的であり、研究されるテキストは対象（対象―言語〔目的としての言語〕）となり、注解はメタランガーシュのカテゴリーに入ります。

ここでもまたプログラムのどの部分を強調するかによって生じる用語の多様性が、数世紀前からヨーロッパの注解を支配してきた伝統の統一性を隠しています。今日、この企ての中心的な具現者として思いつけられるのは、構造批評です。それはテーマ（想像力の所産や、意識的、無意識的固定観念の研究）か、あるいは表現システムそのもの（物語の諸手段、文彩、文体）を対象としています。しかし十九世紀以降に実践されてきたような歴史的で文献学的批評も内在論的な企てに同じように忠実にしたがっているのです。いうまでもなく、各テキストの意味は個別的なそのコンテキストに準拠してはじめて確立されうるのですが、文献学者の使命はこの意味をそれになんらの判断もくわえることなく明示することだからです。現代にもっと近くなると、ニヒリズム的な発想の批評は（文献学のようにもはや実証的ではなく）、すべては解釈であり、作家は自分自身のイデオロギーを覆すのに専心するのだということを証明しますが、それもまた、真理に達する希望をかつてないほど空想的だと決めつけることにより、同じプログラムのなかに留まっているのです。

論争に賭けられたものが何であったか、現在になつてみるとよく分かるのではないでしょうか。文学